

ビッグ・アイ コミュニケーション情報紙

い-こ

BiG-i Communication Paper

The title of our information paper "i-co" is pronounced the same as the Japanese word "aiko," which means here an equal relationship where no one wins or loses. The purpose of this free paper is to offer useful information for everyone, with and without disabilities, with the motto of "Sharing and Caring."

2017

February

vol. 24

「あいこ」は、勝ちも負けもない対等な関係を表す言葉です。「あいこ」は、この分かち合いの精神で、障がいのある人ない人にかかわらずお役に立つ情報を発信します。



スローレーベルによる、新豊洲Brillia(ブリリア)ランニングスタジアムでのパフォーマンス。

i-feature

SWITCH 出合いが可能性を生み出す

ものづくりからパフォーマンスまで幅広い活動を通じて、多様な人が繋がることで、新たな価値観の創出を目指す、特定非営利活動法人スローレーベル ディレクター 栗栖良依さんにお話を聞いてみました。

インタビュー：鈴木 京子(国際障害者交流センター 事業プロデューサー)



出会から生まれる

鈴木 スローレーベルの活動は、ジェラートや雑貨などのものづくりから表現活動など、多岐に渡っていますよね。まずはスローレーベルがスタートしたきっかけと、どんな活動をしているのか紹介してもらえますか？

栗栖 2011年に横浜市の文化観光の交流拠点「象の鼻テラス」のプロジェクト、「横浜ランデヴープロジェクト」に私がディレクターとして呼ばれたのがきっかけですね。

この「横浜ランデヴープロジェクト」は、アーティストと地場産業の職人さんなどの出合いの機会を創出するプロジェクトなのですが、そこに障害者施設の方がぜひやってみたいと言って来られたんです。2009年から実験する中で、障害者施設のものづくりとアーティストの出合いに可能性があることが分かり、このプロジェクトを社会に広めたり、作られたものを一般流通に流すべく、私がディレクターとして

呼ばれたのです。

鈴木 栗栖さんがこの仕事を引き受けようと思ったきっかけはあるの？

栗栖 2010年に右膝に大きな悪性腫瘍ができて抗がん剤の治療や手術をしました。2011年に右下肢機能全廃の身体障害者として社会復帰をしたんです。病気によって一旦、全ての活動をリセットしました。

社会復帰をした時は、これをやりたいとか好きだとかではなく、与えられたものを受け入れようって思って。5年生存率が保証されない中で、来年死ぬかもしれないし、いつ、どんな夢がかなえられるとかではなく、今を生きるって感じで、与えられたものを受け入れるっていう気持ちでした。そんな時「横浜ランデヴープロジェクト」という障害のある人とのものづくりのプロジェクトの話がきたんです。自分がものをつくりたいとか障害者の支援がしたいとかではなかったのですが、人生もリセットしていたし、生き方とか人生観が変わった中で真っ白な状態でした。

横浜ランデヴープロジェクトの仕事で初めて障害者施設に行き、いろんな障害のある人たちと出会って、ものづくりを楽しんでいました。すごくおもしろかったのだけれど、施設の中は、ものづくりのできる人が限られてしまったり、難しかったり、得意不得意とかもあつたりしたので、アートだったらもっと自由にやれるのではないかと思い、2014年の「横浜トリエンナーレ※」に合わせて「ヨコハマ・パラトリエンナーレ」っていうものを立ち上げました。



ヨコハマ・パラトリエンナーレの様子
※横浜トリエンナーレとは、横浜市で3年に一度行われる現代アートの国際展
Photo: 427FOTO

鈴木 「ヨコハマ・パトリエンナーレ」は、現代アートだけだったのですか？

栗栖 どんなフェスティバルにしようかすごく考えて…。それまで障害のある人とプロのアーティストがコラボして新しいものを作るってことをやってきたので、パトリエンナーレもそのスタイルでいくことにしました。アーティスト一人でも生み出せない、障害のある人だけでも生み出せない、二人が出会ったからこそできる新しい表現を生み出してみようと思って。パトリエンナーレでは、現代アートもあったし、パフォーマンスアーツもこのとき立ち上げました。

鈴木 そこから、いまのスロームーブメント、パフォーマンスの活動が始まったの？

栗栖 実はパトリエンナーレの背景には、2012年にロンドンのオリンピック・パラリンピックがあって、私が障害者になって初めてのオリパラだったんです。障害のある人とのプロジェクトをしたことで、パラリンピックの方に注目したんですね。そうしたらパラリンピックの開会式が素晴らしかったのです。いろんな障害のある人たち、個性豊かな人たちがその人にしかできない表現をしていて、すごくカッコよかったですし、おもしろかったですね。

あっ、これってパラリンピックだからできるんだなと思いました。じゃあ、日本ではこういうことができるだろうかと思って、パトリエンナーレの中には舞台芸術パフォーマンスという部門を入れたんです。開会式みたいなものも見据えて、ノンバーバルのコンテンポラリーダンスとサーカスという二つの分野を立ち上げてみたんですね。

鈴木 パフォーマンス活動を始めたころに苦労したことはなかった？

栗栖 ワークショップに全然人が来なかったのです。海外の先駆者的で有名なディレクターが来て申し込みは少ない。本当にあらゆる限りの手は尽くしたけれど人が思ったよりも集まらなくて。障害のある人の参加がほんとに少なくてちょっとびっくりしたんですね。なんでそうなるんだと考えたときに、いろんなバリアが、見えないハードルがあったことに気づいたんですね。来たくても来られない、一人では来られないだったり、自分にはできないって思う心理的なバリアだったり、またワークショップの情報が届けられていないってこともわかりました。物理的なハードルと精神的なハードル、情報面のハードル、いくつものハードルがあるってことに気づいたのです。

鈴木 それが「スロームーブメント」に繋がったんですね。

栗栖 はい。2015年に「スロームーブメント」というプロジェクトを立ち上げてアクセスコーディネーターとアカンパニストという障害者と舞台芸術を作る上での専門性を持つ人を育てて環境を作っていくことを始めました。

アクセスコーディネーター
障害のある人がアート活動に参加するための精神的、物理的環境を整える人
アカンパニスト
障害のある人と一緒に創作活動をする人

栗栖 良依 (くりすよしえ) 特定非営利活動法人スローレーベル ディレクター



1977年東京都生まれ。7歳より創作ダンスを始める。高校生の時にリレハンメルオリンピックの開会式に感銘を受け、卒業後は東京造形大学に進学。在学中から大手イベント会社に所属し、スポーツの国際大会や各種文化イベントで運営や舞台制作の実務を学び、長野五輪では選手村内の式典交流班として運営に携わる。2006～07年、イタリアのドムスアカデミーに留学、ビジネスデザイン修士号取得。帰国後、東京とミラノを拠点に世界各地を旅しながら、各分野の専門家や地域を繋げ、商品やイベント、市民参加型エンターテインメント作品のプロデュースを手掛ける。10年、骨肉腫を発病し右下肢機能全廃。翌年、右脚に障害を抱えながら社会復帰を果たし、国内外で活躍するアーティストと障害者を繋げた市民参加型ものづくり「スローレーベル」を設立。14年「ヨコハマ・パトリエンナーレ2014」総合ディレクターを務め、日本のコ・クリエイションアワードベストケーススタディ賞受賞(インフォパバーン、電通)。第65回横浜文化賞「文化・芸術奨励賞」受賞。リオデジャネイロパラリンピック開会式では、「フラッグハンドオーバーセレモニー」のステージアドバイザーを務める。

仕 組みをつくる 人をつくる

鈴木 栗栖さんの活動の中心って障害者の表現活動なの？それとも障害のある人との地域の活性化？

栗栖 そうですね。私個人で言うと、舞台芸術っていうかパフォーマンスアーツ、市民参加型アートとか市民参加型のパフォーマンス作品っていうのが、私のど真ん中なんです。病気をする前までは市民参加型パフォーマンスに障害者という登場人物はいなかったけれども…。

だんだん自分の生存率が上がってきたので、自分が好きなこと、やりたいことって「モノ」よりも「コト」の方だと。やりたいことに目を向けられるようになったんです。

鈴木 自分の夢や、やりたいことが見えるようになったんですね。

栗栖 舞台芸術のように、形には残らず消えてしまうものの方が好きだし得意なので。だんだんそっちの比重が多くなってきています。

徳島や熊本でのものづくり活動に関してはのれん分けのシステムなんですね。直接何かやるというより、ディレクションをするんです。現地に、ものづくりの作業や活動を担ってくれる人たちがいて、スローレーベルの看板を使いながら運営してってくれます。私がやっていることは、仕組みを作ることなんですよ。ものが生まれるプロセスとか仕組みをデザインするのがわりと専門なので。のれん分けしてもミーティングや定例会には参加します。



Photo: Yukiko Koshima

鈴木 ものづくりと表現活動は違うようだけど、「人づくり」というところで同じじゃない？

栗栖 そうなんです。そのアウトプットがモノになろうが、パフォーマンスになろうが、人になろうが、同じですよ。

鈴木 だから、スローレーベルの活動って多岐に渡っているように見えて、実は根っこは同じなんだなと思っていました。

栗栖 熊本のスロージェラートというジェラートショップなんですけど、あれは工賃を上げることが目的ではなくて、障害のある人がもっとクリエイティブに働ける仕事をどうやったら



作れるか、仕組みづくりの実験の場なんです。あそこで一つ成功事例が作れば、それを全国の地域の人が真似できるんじゃないかと思っているんです。

鈴木 ものを作ってところで終わってしまうと、それだけだけど、人を育てる、仕組みを作るってことは技術や経験が継承され、その人がそこで生きていく糧みたいなものが生まれたり、居場所ができたり。それって表現者や支援者を育てていくこととそんなに変わらないのかなって。

栗栖 そうですね。「ヨコハマ・パトリエンナーレ」も横浜の街とか社会を変えるための仕掛けなんですよ。あれも仕組みづくりで、人だったり価値観を変えることをアートを通じてやってるんですね。

マ スの外にあるチカラ

鈴木 社会の中で抱えている課題を変える仕組みづくりってところでいくと、栗栖さんとしては、多様性を受け入れる社会っていうのが大きな目標だと思うのですが、活動している中で、課題はまだいっぱいあると思います。具体的にどういう課題を解決していきたいって思っていますか？

栗栖 多分日本中の人が今、生きづらさを感じてると思うのです。みんなどこかで感じてる。感じてるはずなんですけど、目先のことに追われ、日常に追われていてどうにもできないんだと思うんですね。

今の社会は、マスプロダクションという言葉で表される大量生産大量消費の世の中ですよ。それって効率よくするためにみんな同じような教育を受け、同じような考え方をし、同じような服を着て、同じような仕事の仕方をするみたいな量産型。すごく画一化されているから、そのペースに乗れない人が社会からは追い出されてしまっているって感じる。障害者と呼ばれている人たちっていうのはその画一化



SWITCH

Photo: Yukiko Koshima



されたマスの中に収まらない人たちだと思うんですね。だから良いとか、だから悪いとかではなくて、自分が病気になる前はそのマスの中にいたと思うんだけど、自分が病気を患って障害者として一歩外に出てみたら、そちらの画一化されたマスの世界の外側にいる人は平均的にすべてができるってことではなくて、すごく得意なものすごく苦手なものを持って人たちがかもしれないと思って。人と人、人と地域、何かを掛け合わせた化学反応で新しいものを生み出すって活動しようと思ったときに、もうこの大量な社会の中で同じような考え方をしている人たちが掛け合わせたところで生まれてくるものって・・・

鈴木 同じものだと？

栗栖 はい。同じもので、一人ひとり違う人たちが繋ぐ方が自分の想像つかないものが生み出せる。そこが面白いと思ったんです。行き詰まってる社会を変えられるのは実は画一化された世界の外側の人たちがなんじゃないかと。そこにすごく可能性があると思う。

社会に生きづらさを、このままじゃいけないって思うなら、少し立ち止まって外側の世界を見ようよということ言いたい。そこが価値観の転換だったり視点が逆転することだったりすると思うんです。そうすると何か突破できるものがあるのでは？それこそが次の社会の在り方、パラダイムシフトなのかなって思っています。

鈴木 で、そこに2020年東京オリンピック・パラリンピックっていう、ひとつの大きな転換できるチャンス、きっかけになるタイミングが生まれてきたよね？

栗栖 最大のチャンス、このチャンスを逃してしまったらもう今のこの世の中ってほんと立ち行かなくなるんじゃないかという危機感すらある。最大限活かせるようにしたいと思うし、チャンスを打ち出せるのは、マスの中に乗っていない人たちこそが主役になるということなのかなと思う。彼らにがんばって引っぱって行ってほしい。それがスタンダードになってしまえばおのずと変わると思っているから。

鈴木 マスの中にいる多くの人たちって外側に人がいることに気づいてないことがあるよね。

栗栖 うんうん。ありますね。

鈴木 実はこんなに人は多様であなたたちは一部の囲いの中だけで、ほんとは社会ってこんなに広いんだよ、いろんな人がいるんだよって見せるひとつのチャンスでもあるのかなって思う。

栗栖 そうですね。

2 020東京へ

鈴木 オリンピック・パラリンピックをやるなら、単にフェスティバル的なお祭りごとで終わるんじゃなくて、社会を変えられるチャンスって捉えて有効的なものにしていきたいね。

栗栖 はい。わたしは開会式をすごく大切に捉えていて、6万人、7万人もの世界中の人がスタジアムで目撃し、さらにテレビの向こうで20億人ぐらいの人が目にするんですよ。その規模で作れる舞台芸術作品なんてないと思うんですよ。多分、世界最大の舞台。そこからメッセージを発信できるんです。

開会式の舞台には、3000人ぐらいの人が出演することができるので、少なくとも半分の1500人ぐらいは障害のある人がパラリンピックに関しては出るべきだと思うし、特に中心的な役割を担うキャストに関しても100人ぐらいは障害のある人が入ってほしいなと思っています。

日本には障害のあるパフォーマーやダンサーが少ないので、これから、そういう人がどんどん出てきてほしいと思うし、サポートする人も同じぐらいの数必要だと思うので、そういう人材を作っていきたい。そこで培われるノウハウや経験を積んで育った人が2020年以降に全国でそれを継続させていく人になる。舞台に立った障害のあるダンサーが地域で指導者になれるとか、それで食べていける人がどれだけのかわからないけれども、そこまでいったらいいと思います。

鈴木 パラリンピックセレモニーのためにだけでなく、日々の生活や居場所、生きていくうえでの選択肢を増やせる環境や人づくりっていうのが大切ですよ。パラリンピックの開会式は数時間で終わるけれども、障害者だけでなく支援する人も含めて、育った人が社会を変えていく大きな力になりますよね。

具体的にはスローレーベルとしてはどんなことをやっているの？

栗栖 今年の12月9日に新豊洲Brilliaランニングスタジアムがオープンしたんです。館長は為末大さんなんですけど、その施設を使って開閉会式や文化プログラムで活躍するダンサー、パフォーマー、支援人材を育てたいと思っています。

鈴木 リオのパラリンピック、フラッグハンドオーバーセレモニーを経験してリアルに課題が見えたのかなと思うんですが、リオの話をしてもらっていいですか。



栗栖 2015年からアクセスコーディネーターやアカンパニストの育成に取り組んでいたこともあって、リオのパラリンピックフラッグハンドオーバーセレモニーのステージアドバイザーとして、アクセスコーディネーターやアカンパニストとともにリオに行ってきました。キャストは19人。そのうち9人が障害のある人だったんですね。義足の人もいれば車いすの人もいますしダウン症とか全盲の人がいて、彼らが自宅を出てからリオの舞台に立つまでをアクセスコーディネーターやアカンパニストがサポートしてきました。

リオでのセレモニーは8分間で、今の体制でできるっていう手応えがつかめたけれども、じゃあ2020年までってなったとき、数時間の開会式に2000人、3000人が舞台に出るセレモニーを作ろうと思うと、もっともっと人材が必要だと思いました。

鈴木 表現者としての参加以外に観客としても、どれだけの人が参加できるかですよ。観客ってっていうところの視点でみると、リオはどうでしたか？アクセシビリティのところなんかは？

栗栖 はい。2012年のロンドン大会って演出家自身が難聴の人だったんですよ。スタジアムでの観客やテレビの向こう側に見えない人や聞こえない人がいるってことを想定して情報保障のサポートもしっかりされてたんですね。けどリオはあまりそれがなかったかな…。日本ではそこもきちんとやりたいですよ。

鈴木 パフォーマーとして立つだけじゃなくて観客としての参加もできる環境にしたいですよ。まずは、2020に向けては全国の舞台芸術活動をしている障害者の方とか団体と連携してそれをもっと大きなムーブメントできるといいですよ。

栗栖 はい、そうですね。全国規模でやりたい。自治体や劇場などと連携して全国規模、オールジャパンでやりたいっていう。みんなを巻き込む(笑)

鈴木 最後になりましたが、今後の活動予定を聞かせてください。

栗栖 2月11日に新豊洲Brilliaランニングスタジアムでスロームーブメント豊洲公演があります。

また、2月12日に青山のスパイラルでフォーラムをやろうと思っています。障害のある人たちの作品を2作品と2020年に向けてインクルーシブな舞台芸術の創造に関するフォーラムを開催します。たくさんの方に興味を持っていただき、来ていただきたいなと思います。

鈴木 フォーラムには私も参加する予定です。次はパネリストとしてお話しします。

イベントの詳細は、4面をご覧ください！



Information

多様な人との出会いから生まれる
新たな芸術

新豊洲

SLOW MOVEMENT

-The Eternal Symphony- 2nd mov.

スロームーブメント エターナルシンフォニー セカンドムーブ

「大地」をテーマにダンサー森山開次が
市民パフォーマーを創作するパフォーマンス公演

日時 2017年2月11日(土)
14:30～ 開場14:00

会場 新豊洲Brilliaランニングスタジアム
(東京都江東区豊洲6-4-2)

総合演出 栗栖良依(SLOW LABEL)
演出・振付 森山開次
詩 三角みづ紀



Kaiji Moriyama
Photo: Sadato Ishizuka

申込先
スローレーベルウェブサイトにて受付中
観覧無料/事前申込制(応募多数の場合、抽選)
<http://www.slowlabel.info/> または [スローレーベル](#) 検索

主催:スロームーブメント実行委員会(特定非営利活動法人スローレーベル、スパイラル/株式会社ワコールアートセンター)

青山

Next Stage! ショーケース&フォーラム

2月は新豊洲・青山に
ぜひお越しください!

ショーケースでは少数精鋭のパフォーマーたちが挑戦した「実験的な作品」をご覧いただけます。また東京オリンピック・パラリンピックにむけた障害者の舞台芸術を考えるフォーラムを同時開催。インクルーシブな舞台制作に取り組む団体、文化芸術関係者の交流会も。

日時 2017年2月12日(日) 14:00～17:30(予定)※終了後交流会あり
会場 スパイラルホール(東京都港区南青山5-6-23 スパイラル3F)

ショーケース 総合演出 栗栖良依(SLOW LABEL)

No.1 多様なダンサーたちによる現代サーカス

演出:金井ケンスケ 出演:大前光市/かんばらけんた/森田かずよ/吉田亜希/高津会/定行夏海

No.2 聞こえないダンサーたちによるダンス劇

演出:熊谷拓明 出演:鹿子澤拳/南雲麻衣

フォーラム

栗栖良依(SLOW MOVEMENT総合演出、特定非営利活動法人スローレーベル 理事長)

柴田翔平(Stopgap Dance Company プロデューサー)

菅野 薫(株式会社電通 CDC/Dentsu Lab Tokyo グループ・クリエイティブ・ディレクター/クリエイティブ・テクノロジスト)

鈴木京子(国際障害者交流センタービッグ・アイ 事業プロデューサー)

Program

平成28年度 ビッグ・アイ職場体験

～『ソーシャルファームビッグ・アイ』に向けた自主事業～

ビッグ・アイを舞台とした『ホテルやレストランなどサービス業における職場体験』では、これまでの2年間を通じて、若者支援機関、特別支援学校、福祉サービス事業所、就労支援団体、大学や高校など全国から250名以上のご参加をいただき、大きな反響をいただけてきました。

実際にお客様をお迎えする現場での業務体験を通じて、参加した体験生からは「最初はどこまでやれるか不安でした。お客さまに『ありがとう』と言ってもらい、自信になりました」といったお声もいただいています。

平成28年4月からはビッグ・アイの自主事業として独立。さらに進化した『BiG-i(ビッグ・アイ)職場体験』に取り組んでいます。

学校の先生、支援機関、相談員、ワーカーなどを通じてお申込みください。



お問合せ・お申し込み
ビッグ・アイ職場体験担当
TEL 072-284-0850 (電話受付時間15:00～18:00)
Eメール taiken@big-i.jp

誰もが食事を楽しめる
レストラン ぐらん・じゅ
7:00～21:00(ラストオーダー 20:30)
席数 50席(全席禁煙)

レストランから

優食セットメニューをリニューアル!

レストランぐらん・じゅでは以前より摂食支援食として、やわらかいお食事「優食セット」をご用意しておりますが、このたびメニューをリニューアルいたしました。ご家族でのお食事などにぜひご利用ください。

- ★優食 ハンバーグセット
- ★優食 豚肉のしょうが焼セット 新メニュー
- ★優食 ぶり大根セット 新メニュー

各¥1,500 (スープ、吹き寄せ野菜、ライスまたはおかゆ付)



ぐらん・じゅ冬の和スイーツ **ぜんざい** で
身も心もあたたまりませんか?

- ★ぜんざい(単品) ¥600
- ★ぜんざいセット ¥750 (コーヒーまたは紅茶付)



Present!

プレゼントクイズ

今号の特集記事からの出題です

スローレーベル「エグリ・ウエア」を
5名様にプレゼント!!

Q 栗栖さんがディレクターをしているのは?

ヒント カタカナ3文字

レーベル

5名様



デザイナーふくいあつこと手捺染職人とのランデヴー。地域作業所「ハートランド」で描かれた個性豊かな水玉模様は、一枚一枚に違う配色を演出し、自分色を探す楽しさを与えてくれます。とてもおしゃれなデザインスカーフです。

■応募方法

クイズの答えと下記の必要事項をご記入の上、ハガキ、ファックス、Eメールのいずれかでご応募ください。

①氏名(ふりがな) ②郵便番号 ③住所 ④電話番号 ⑤本紙へのご感想やご希望、ご質問など
正解者の中から抽選で5名様に景品を発送させていただきます。当選者の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。
※読者のみなさまからいただいたご意見を「i-co」紙面でご紹介する場合があります。予めご了承ください。

ご応募の際にお預かりする個人情報については、個人情報保護関係法令を遵守し、本紙の運営・実施の目的以外には使用いたしません。

■応募締切

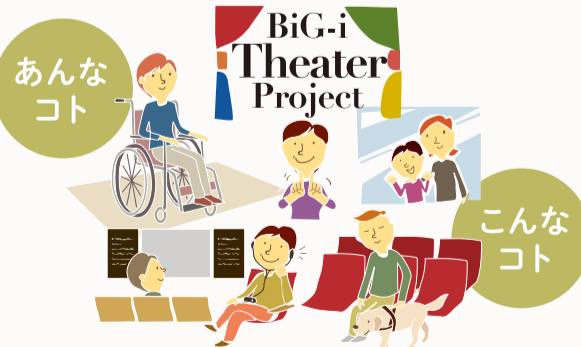
2017年2月28日(火)消印有効

■応募先

〒590-0115
大阪府堺市南区茶山台1-8-1
ビッグ・アイ「i-coプレゼント」係
FAX 072-290-0972
Eメール i-co@big-i.jp

鑑賞サポート相談窓口

手話通訳や要約筆記、音声ガイドなど、さまざまな鑑賞サポートに取り組むビッグ・アイ。鑑賞サポート相談窓口では、誰もが楽しめる舞台づくりや鑑賞サポートに対するご質問、ご意見を受付けております。企画や運営方法など、さまざまなご質問にお答えします。



ご質問・ご相談は ビッグ・アイ「鑑賞サポート」係
Eメール theater@big-i.jp



編集・発行 国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)広報
〒590-0115 大阪府堺市南区茶山台1-8-1
TEL 072-290-0962 FAX 072-290-0972

発行日 2017年1月15日

アートやイベントなどの情報満載!スタッフがビッグ・アイの日々を綴ります。



Facebookページもご覧ください!

<https://www.facebook.com/bigartproject>